

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020

清流の国ぎふ芸術祭  
Art Award IN THE CUBE 2020

IN  
THE  
CUBE  
2020

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2020

2020.6.2-7.5

目次  
Contents

- 004 ごあいさつ  
Foreword
- 006 開催概要  
General Information

審査員・講評  
Judges・Comments

- 009 遠藤 利克  
ENDO Toshikatsu
- 010 川口 隆夫  
KAWAGUCHI Takao
- 011 篠原 資明  
SHINOHARA Motoaki
- 012 高嶺 格  
TAKAMINE Tadasu
- 013 福岡 伸一  
FUKUOKA Shinichi
- 014 藤森 照信  
FUJIMORI Terunobu
- 015 村瀬 恭子  
MURASE Kyoko

第1章 – 図版  
Chapter1 – Catalogue

- 019 占部 史人  
URABE Fumito
- 023 ADRIAN O.SALES  
エイドリアン オー サレス
- 027 大西 康明  
ONISHI Yasuaki
- 031 大貫 仁美  
ONUKI Hitomi
- 035 笠原 巧  
KASAHARA Takumi
- 039 川角 岳大  
KAWASUMI Gakudai
- 043 北川 純  
KITAGAWA Jun
- 047 高橋 臨太郎  
TAKAHASHI Rintaro
- 051 竹中 美幸  
TAKENAKA Miyuki
- 055 宙宙  
chuchu
- 059 橋本 哲史  
HASHIMOTO Satoshi
- 063 平田 昌輝  
HIRATA Masaki
- 067 御宿 至  
MISHIKU Itaru
- 071 森本 孝  
MORIMOTO Takashi
- 075 保良 雄  
YASURA Takeshi
- 079 山本麻璃絵 + 姫野亜也  
YAMAMOTO Marie + HIMENO Aya
- 083 Yuni Hong Charpe  
ユニ ホン シャープ
- 087 W.N.project  
ワンニャー プロジェクト

第2章 – 記録  
Chapter2 – Document

- 092 募集から審査までの記録
- 096 作家支援・AAICサポーターズ(ボランティア)活動
- 097 関連プログラム
- 100 展覧会概要
- 101 新型コロナウイルス感染症対策
- 102 オープニングセレモニー  
表彰式

第3章 – 資料  
Chapter3 – Data

- 104 スケジュール
- 105 広報
- 108 運営体制
- 110 来場者アンケート
- 112 企画委員長 総評  
Project supervisor's Comment

## ごあいさつ

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、69回の歴史を刻んだ岐阜県美術展を刷新し、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的として創設した、3年に1度開催する全国規模の企画公募展です。

2回目となる今回は、作品の自由度を高めるため壁や天井のないキューブによる作品も可としたほか、会場を県美術館と隣接する県図書館の庭園に拡大するなど、前回から大きく進化しました。これにより、海外55作品を含む710作品の応募をいただくなど、大いに存在感を高めることができました。

一方で、展覧会は、新型コロナウイルス感染症が広がる中での開催となりましたが、会期の変更やオンラインでの審査会開催など工夫を重ねつつ、文化芸術を楽しむ新しいかたちを示すことができたと思います。

作品応募者、審査員、企画委員など関係者の皆様、展覧会に足をお運びいただいた多くの皆様のご支援・ご協力に、改めて感謝申し上げます。

また、今回、入選されました作家の皆様が、このAAICを契機として、全国そして世界へ羽ばたいていかれることを祈念するとともに、本展覧会が、岐阜県の文化芸術の更なる発展に寄与することを心から願っております。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会  
名誉会長 岐阜県知事 古田 肇

## Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE is a nation-wide open-call exhibition project held once every three years and was created as a new take on the Gifu Prefecture Art Exhibition, which had been held 69 times in the past, in the aim of goal of unearthing and fostering new, immensely creative talent.

This second holding of the exhibition developed beyond the previous exhibition by accepting pieces in cubes not bound by walls or ceilings to allow artists more creative freedom and also by expanding the venue to the Gifu Prefectural Library's garden next to the Museum of Fine Arts, Gifu. As a result, we were able to give the exhibition a much greater presence and received applications for 710 pieces, including 55 from overseas.

The exhibition was held against the backdrop of the spread of COVID-19, but through measures such as changing the exhibition period and holding the meetings of the judging committee online, I believe that we were able to exhibit a new way of enjoying art and culture.

I would like to express once again my gratitude to the applicants, judges, planning committee, and all of the others involved, as well as the many who came out to view the exhibition, for their support and cooperation.

Furthermore, it is my sincere hope both that this AAIC will have served as an opportunity for the artists who were selected to participate this time to step out onto the artistic stage of Japan and the entire world and also that the exhibition helps the art and culture of Gifu Prefecture to develop yet further.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE  
Executive Committee

Governor of Gifu Prefecture Furuta Hajime  
Honorary Chairman

## ごあいさつ

当初4月18日から6月14日までの開催を予定していた「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020」は、全国的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、一時は開催自体が危ぶまれていましたが、事前の来館予約、岐阜県感染警戒QRシステムへの登録など、様々な感染拡大防止対策にご協力いただきながら、6月2日から7月5日までの30日間で、7,759人もの方にご鑑賞いただけたことを大変嬉しく思います。

実際に展示いただいた18組の作家の皆様には、新型コロナウイルス感染症により制作が難航したり、開催の見通しが不透明であったりと様々な問題がございましたが、開幕に合わせて、今回のテーマである「記憶のゆくえ」を表現した大変魅力的な作品を完成いただけたことを、心から感謝申し上げますとともに、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

最後に、本展覧会の開催にご支援ご協力を賜りました全ての皆様に深く感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会  
会長 土屋明之

## Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020 was originally planned to be held from April 18 to June 14, but there was a period where it uncertain whether the event could be held as the impact of the spread of COVID-19 was felt in Japan. That being said, I'm extremely happy to report that 7,759 people were able to enjoy the artwork during the 30-day period from June 2 to July 5 while cooperating with various infection prevention measures, including advance viewing reservation systems and the Gifu Prefecture QR Code Infection Alert System.

COVID-19 was a cause of various problems for the 18 artists or groups of artists who actually exhibited their works, such as difficulties in production and concerns as to whether the event would be held. With that in mind, I am incredibly grateful to all of the artists who completed many simply enthralling pieces expressing the event's theme, "Kioku no Yukue (Where Our Memories Go)" in time for the exhibition's opening and would like to offer my best wishes for the continued success of their endeavors going forward.

On a final note, I would also like to sincerely thank everybody who offered their support and cooperation to make this exhibition possible.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE  
Executive Committee

Tsuchiya Akiyuki  
Chairman

## 開催概要

名称	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020
目的	・新たな才能の発掘と育成 ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供
テーマ	「記憶のゆくえ」
作品条件	4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)のキューブ空間で展示できること。
会期	2020年6月2日(火)から7月5日(日)まで(開館日:30日間)
会場	岐阜県美術館(岐阜県岐阜市宇佐4-1-22) 岐阜県図書館(岐阜県岐阜市宇佐4-2-1)
展示数	18作品
審査員	遠藤 利克 彫刻家 川口 隆夫 ダンサー・パフォーマー 篠原 資明 詩人・美術評論家/高松市美術館館長 高嶺 格 美術家/多摩美術大学教授 福岡 伸一 生物学者/青山学院大学教授 藤森 照信 建築家/東京都江戸東京博物館館長 村瀬 恭子 画家/多摩美術大学教授
主催	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会、岐阜県

## General Information

Name	Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020
Purpose	- To discover and nurture new talent. - To train people related to art and to create a network. - To offer opportunities for appreciation of new forms of art.
Theme	“Kioku no Yukue (Where Our Memories Go)”
Conditions	Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m(d)x 3.6m (h).
Exhibition period	June 2 (Tue.)–July 5 (Sun.) 2020: Open for 30 days
Venue	The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City Gifu Prefecture) Gifu Prefectural Library (4-2-1 Usa, Gifu City, Gifu Prefecture)
Number of exhibits	18 Works
Judges	ENDO Toshikatsu Sculptor KAWAGUCHI Takao Dancer and performer SHINOHARA Motoaki Poet and art critic/Director of Takamatsu Art Museum TAKAMINE Tadasu Artist/Professor at Tama Art University FUKUOKA Shinichi Biologist/Professor at Aoyama Gakuin University FUJIMORI Terunobu Architect/Director of Edo-Tokyo Museum MURASE Kyoko Painter/Professor at Tama Art University
Hosts	Executive Committee of Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020, Gifu Prefecture

## 審査員・講評

Judges・Comments



遠藤 利克

彫刻家

ENDO Toshikatsu

Sculptor

### 一次審査講評

プランと実作のあいだの試行錯誤の中に、  
作品制作に関わる一番重要な要素、あるいは秘密が潜んでいる

選考作業を重ねていく過程で、応募者の意図への理解が進み、それなりの公正な選考はできたのではないかと考えています。

選考の過程でみてきたのは、書類選考という方法の限界性です。その限界性自体は、マケットがあったとしても変わらない種類のものです。限界と感じられる最重要事項は、実際に作品が完成した時の作品としての作品度というか、それぞれの作品が

もたらず感動の質のようなものを、どうしても測りかねるということです。私は、プランと実作のあいだの試行錯誤の中に、作品制作に関わる一番重要な要素、あるいは秘密が潜んでいると考えます。しかし、プラン提出による公募制という方法においては、視野に限界が生じざるを得ないことも確かです。とはいえ、選考方法にさらなる工夫、さらなる改良を望みたいところではあります。

### 二次審査講評

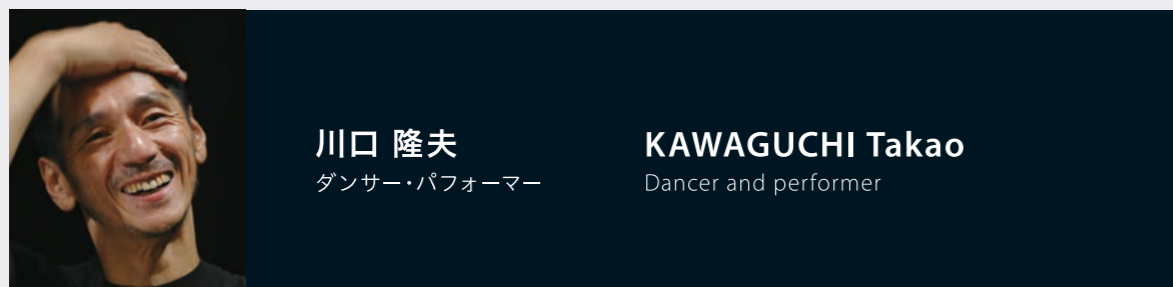
概念的枠組みの突破

われわれは言語的存在であり、それゆえに、美術作品といえども概念的枠組みの包囲を免れることはできない。とはいえ、作る側にとっても、見る側にとっても、美術作品は、生の全体性として体験される時にのみ、固有の質として現れ得るといえる。

そして、全体性的体験に至ることを目途とするかぎり、ほんの僅かではあってもその枠組みを突き抜けて、向こう側の次元へと出現することが要請される。一定のサイズのキューブが条件として与えられ、各作家の思考はより明確なものとして伝播する。

それがこの企画のユニークなところだが、今回展で明らかになったのは、“概念”の枠組みを突破することの困難さの方であった。

唯一、川角岳大の「私たちの知らない犬」のみが、その壁、つまり“説明の言語”の壁を微かながら超えていきそうな気配を漂わせていて、希望を懐かせた。今後、突き抜けた向こう側に広がる領域こそが、エロチシズムの時空であるという、薄明の知覚が訪れるならばと…。



川口 隆夫

ダンサー・パフォーマー

KAWAGUCHI Takao

Dancer and performer

## 一次審査講評

私たちの知らないところで記憶、記録、歴史が  
消され書き換えられようとしていることへの抵抗かもしれない

子どもの頃僕は、この世界が今しがた一瞬にして出現した、というオブセッションにとらわれていた。空も山も川も地層も化石も、複雑な社会も人間関係も、自分の記憶さえも、あらゆるものがプロセスなしに一瞬のうちに生成されてしまった…？

そんな妄想は別にして、今回のArt Award IN THE CUBE 2020 では時空の広がりを一気に一点に凝縮したような、あるいは一刀両断にして切り出してみせる作品コンセプトがいくつかあり、その鮮やかさに

想像力を刺激された。

また一方で、いくつかのプロセスを経て記憶を書き留めよう、あるいは創り出そうというものも、少なからずあったように思う。複数の視点から言葉や動き、風景を重ねつなぎ合わせて自分たちの物語を自分たち自身の手で紡ぎだすという提案は僕にとってとても新鮮だった。私たちの知らないところで記憶、記録、歴史が消され書き換えられようとしていることへの抵抗であるのかもしれない。

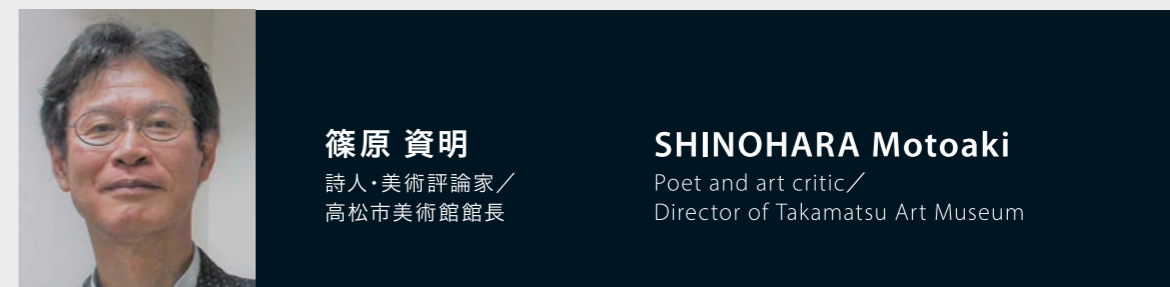
## 二次審査講評

解き放たれたファントムロボット

プシューッ音とともにオープンキューブ内に宙づりになったいくつかのエアポンプがわずかに伸縮し、連結されたワイヤーが引っ張られて奇妙なジャングルジムのような構造体が蠕動する。手足を失った人がないはずの手足に感じる感覚(幻肢痛)の神経伝達信号に反応して動くこのファントムロボットが、ひょっとしたらそのままキューブから出て行って岐阜の山々を登っていくのではと想像させワクワク。繊細な動きや感覚の記憶が壮大な風景の中に解き

放たれて、爽快！これほど愛くるしくかつ切ないロボットを私は見たことがない。失われた四肢のダンス。私もこんなダンスが踊りたい。

AAIC2020 展全部を見終わってとにかく楽しかった。来て本当によかった。世界は今、未曾有の危機に直面している。そして駄目押しの非常事態。ようやく開催にこぎつけた本展、そして本作は、窒息寸前の私たちを優しさに満ちた爽やかな初夏のピクニックへ連れ出してくれた。



篠原 資明

詩人・美術評論家/  
高松市美術館館長

SHINOHARA Motoaki

Poet and art critic/  
Director of Takamatsu Art Museum

## 一次審査講評

さまざまな過去に対して、  
どれだけの新しみを提案できるか

芸術の本質は、新しみつ振りかえることにある。その場合、力点は新しむことにある。ただ、「記憶のゆくえ」をテーマとする今回の展覧会では、どのような過去を振りかえるかを考慮せざるをえない。したがって、どのような過去を、どのように新しく振りかえるかが、課題となる。

各企画書が振りかえろうとする過去は、生命の過去から神話的な過去、家族の過去から個人的な過去にいたるまで、さまざまであった。ただ、日常的に

なじんできた過去もまた、振りかえりの対象となるだろうし、使われなくなった素材も、振りかえりの対象となるだろう。いにしへの芸術作品や、伝統的技法も、同様である。このようにさまざまな過去に対して、どれだけの新しみを提案できるかが、審査に当たったポイントとなった。幸か不幸か、700点を超える応募の中から、18点を選ぶのは、ワタシの場合、比較的容易であった。その分、仕上がりの展示が、大いに期待される場所である。

## 二次審査講評

コンセプトと作品とのあいだにある乖離を痛感

コンセプトと作品とのあいだに多少とも乖離があるというのは、ありがちなことだが、今回の展示作を目にして、あらためて痛感した次第である。ただ、素材の選択と手法の点で、有無をいわせぬ独創性を感じさせたのは、竹中美幸だった。映画用のフィルムという、いまや過去の遺物に追いやられつつある素材を用いて、光の痕跡と音の記憶を提示しようとした作品は、記憶のゆくえというテーマにふさわしく、審査員賞として推させていただいた。また、コンセプト審査

の段階では見過ごしていた保良雄の作品は、ピリッとした空間の中で、久しぶりにゾクッとした感動を味わわせられた。そんな中、コンセプトも作品も興味深かった例として、大西康明の展示も挙げておきたい。

ほかに、コンセプトは興味深いのに、実際の作品では、うまく作動しないものや、あらが目につくものもあった。意欲的な試みも多かっただけに、残念な思いをしたことも言い添えておきたい。



## 高嶺 格

美術家／多摩美術大学教授

## TAKAMINE Tadasu

Artist／Professor at Tama Art University

## 一次審査講評

作品が箱から大きくはみ出し、  
無化されるという想像を掻き立てる

3m60cmというサイズ規定について。大き過ぎも小さ過ぎもなく、人間の身体スケールおよび箱の製作費用に鑑みて割り出した妥当なサイズであると思う。多くの経験を持つ作家は、このサイズを念頭に「空間の全体を満たす」形でプランを考案した。「インсталレーション能力」はここで求められていることでもあり、選ばれたプランの多くは空間全体をうまく使っている。しかし私が今回審査するに当たって最も煩悶したのは、その「器用さ」をどう評価

するかについてである。そもそも物理的な空間が必要ない、またはこのサイズには到底収まりきらないプランがある。「アイデアのスケール」が、設定された「空間のスケール」にそぐわないと思えるケースについて、この場でどう評価するか？個人的には、作品がこの箱から大きくはみ出し、ついには無化されるといった想像を掻き立てるプランをいくつか選んだ。サイズを規定する意義が、まさにそこに現れているように感じたからである。

## 二次審査講評

作品から離れて膨らむ想像力

(コロナで諸々の日程が変更になった。日程変更によって生じた個々の作家への影響については憂慮するものの、審査自体に特別な影響はなかったと思う。以下個別評と所感。) 山本+姫野氏の「石斧」。ザ・彫刻の素材(石と木)を使い、こんなに柔軟な表現ができるのかという驚き。一人で考え込んでいない空気感もいい。しかもその軽さ(実際の作品は重たいのに、なぜか軽い)を、作品のフォルムよりもむしろ態度で示している点が良い。川角氏。どの方角から見ても絵になるインсталレー

ション。「自分の飼っていた犬」にモチーフを集約するあたりを含め、状況を俯瞰的に見る視点と大胆さを持っていると感じた。森本氏。アートの外から投げ込まれた爆弾のようで、作者の脳の薄皮をおそろおそろめくりながら鑑賞するような緊張感がある。コメントが難しいが最も困惑させられたため審査員賞とした。他にも特筆すべき作品は多く、展覧会として充実していた。作品を見た観者の想像力が、定められた空間を離れてどれだけ膨らむかを基準に審査した。



## 福岡 伸一

生物学者／青山学院大学教授

## FUKUOKA Shinichi

Biologist／Professor at Aoyama Gakuin University

## 一次審査講評

鮮やかな記憶とは、自己愛的回路の変形

物質としての生命体は、絶えず分解と合成を繰り返す危ういバランス—動的平衡—の上にある。そんな中であってどうして記憶は“保持”され続けるのだろうか。それは、記憶が物質レベルにあるのではなく、物質と物質、あるいは細胞と細胞の関係性のレベルに存在するからだ。しかし、その関係性もまた、相補的な結びつきを維持しつつ、常に更新されていく。つまり、記憶が“保持”されていると感じるのは幻想でしかなく、記憶はいつもたった今作り直されていると

いってよい。鮮やかな記憶とは、自分が繰り返し呼び出し、彫像し、強化している自己愛的回路の変形といえる。そんな不確かな記憶のゆくえを、流れゆくもの、移ろうもの、揺れるもの、それでいて、ある種の幾何学的な秩序を示し、動的なさざ波を引き起こし、ときに美しくさえ見えるものとして具体化できた表現。そんな作品に出会えればうれしい。そう願って審査に臨んだ。

## 二次審査講評

記憶ははかない電氣的現象

与えられた直方体空間に作家がそれぞれ独自の小宇宙を創出してみせる。今年のテーマは「記憶のゆくえ」。記憶とは何か。生物学的には、記憶に物質的な根拠は何もないことがわかっている。つまり、脳の奥深くにマイクロなビデオテープが保存されているわけではない。むしろ記憶とは、思い出すたびに新たに作られるものであり、一回限りの、はかない電氣的現象にすぎない。なので、生物学者としての私は、記憶を、動的で、

不安定で、たえず移ろいつつ、あやういバランスの上に現れるもの、一ちょうど宮沢賢治が言うところの「仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明」のような何か一、としてイメージした作品を面白いと感じ、審査することにした。一方で、記憶は、やがては必ず滅び去る私たちの人生を支えるなものかでもある。「記憶は死に対する部分的な勝利だ」これはカズオ・イシグロが私に教えてくれた言葉である。





### 藤森 照信

建築家/  
東京都江戸東京博物館館長

### FUJIMORI Terunobu

Architect/  
Director of Edo-Tokyo Museum

#### 一次審査講評

キューブの中にあれば  
すべては優れた作品になる可能性を持つ

街を歩いていると、道路を掘り返したり電信柱の上のほうに何か取り付けたりしている工事現場に出くわす。そして思う。もしこのシーンが美術館にあってインスタレーションと名付けられていたら、きっと私はそれを作品として鑑賞するだろうと。

街の中の解体時、工作的なシーンでなくとも、たとえばありふれた一本の樹を林の中から伐って、美術館の四角な箱の中に立てたら、きっと私はそれをシュールレアリスムの作品として鑑賞する。キューブ

の中にあればすべては優れた作品になる可能性を持つ—そう思いながら審査し、目で見てゴロっとして分かりやすい“石斧”と、その反対に体感でしか分からない“カタツムリ”の二つを実物で感じたい、と思った。

立体物を審査するとき、マケットがあれば理解しやすいが、現実的ではないのだろうか。

#### 二次審査講評

想像を超えた表現の発想力

現代美術の審査は当りハズレが大きく、一作でも心に残るものがあれば審査したカイがあるというのだが、今回は〈石斧をモチーフにした石斧の彫刻〉と〈質量保存の法則〉と〈時間の溝〉が良かった。

猿の段階でも棒と石は道具として使われていることが判明しているが、棒と石を組み合わせる石斧は、人類の段階で初めて出現し、人類は石斧を振るって以後の人間への道を切り拓いている

その石斧をテーマにしてこんなに変化に富み、かつ力強い表現が可能になるとは思ってもいなかった。人間と木(棒)と石、この三つの組み合わせの中には人が物を作ったり表現したりすることの本質が潜んでいる。このことを気付かせてくれる作品で、大賞に値すると思った。

〈質量保存の法則〉は、ベンチに腰かけて眺めていると、子供に帰ったような気分になり、飽きなかったので、審査員賞とした。



### 村瀬 恭子

画家/多摩美術大学教授

### MURASE Kyoko

Painter/Professor at Tama Art University

#### 一次審査講評

触れたら手をすり抜ける幻のような瞬間を  
どうにか留めようと創作の冒険を続けることになる

700点をも超える応募プランに目を通すにつれ記憶の波に溺れそうだった。海底に沈み込みもう何も見えない、と幾度も力尽きそうになった。今では私自身がゆくえ知れずの彷徨い人になってしまったようだ。どのプランも決して明確にそれを手に掴んではないと強く感じる、「記憶」というものは、触れたと思ったら途端に手をすり抜けて「ゆくえ」を眩ます生き物なのだろう。お陰で私たちはその幻のような瞬間をどうにか留めようと創作の冒険を

続けることになる。予想を上回る数の魅力的な平面プランと出会えた事も幸福でした。絵画は、それに対してうってつけのメディアであると信じているが実見せずにその現場を想うことはとても難しい。あらゆる表現においてコンセプトとプランでなにが分かるの!?とあなたも私も考えたりするけれど、もはや信頼と愛情と敬意をもって実際にキューブの中に立ち現れる作品をととても心待ちにしています。

#### 二次審査講評

離れ難い空間

自粛生活から放たれ美術館に着くと「知人の家」のように CUBES が私を招き入れ、再会するような感覚だった。《そして、「宇宙の子」は、自ら造った「仄かに酔っている AI」と対決する。》へ入り込めば、微かに漂う電子音と書き留められた言葉が祭壇上?のおびたしい魂を見事に昇華させ、明日の方向を示していた。個人賞の《Repaet》では、正面の少女が私に語りかけ、奥の鏡に映る作者?が観客と同調していく構造に親密さが増し、左右に鏡面する

映像へのアクションもダイナミックで身体に宿る記憶がダンサーによってチャージングにリレーされ、離れ難い空間となっていた。プランとは異なる展開を見せた《私たちの知らない犬》に至っては、もはや「家」でもなくやたら見晴らしの良い「風景」がそこに立ち上がり、作家のジャンプ力がとても清々しかった。プリミティブなエネルギーを信じたくなるような1日を過ごし、受け取った数々の記憶を細胞に反芻させながら豊かな気持ちで帰路についたのだ。